
しあわせ村 物語

サイキアスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しあわせ村 物語

【NZコード】

N4192A

【作者名】

サイキアスカ

【あらすじ】

ランは「しあわせ村」に引っ越ししてきた！この村は自然がいっぱいだけど、ハイテクな技術があちこちに！いろんなことが起きる「しあわせ村」でランが大活躍！

第一物語・しあわせ村（前書き）

ザー ザー ザー 雨の中タクシーは走り続ける。

第一物語・しあわせ村

冬。大雨の中、タクシーが走っていた。

中には運転手と9歳くらいの少女。

「譲ちゃん、名前なんて言うんだ?」

「「ラン」です」

少女は答えた。

「ランか・・ランって花言葉知ってるか?確か・・・美人だつたよ

うな

ランは、眼を大きくした。

「ところで、ランちゃん。どこへ行くんだっけ?」

「えつと・・・「しあわせ村」です」

「しあわせ村か~・・あそこはいいといひだよな~・・「ランちゃん
はあそこのどこが気に入ったんだ?」

運転手は雨だとこのに、後ろを向いて話した。

「え・・・やつぱり、海・・・とか?」

「海か~ そうかそうか。やつぱりな」

そう言つと、運転手は前に体を向け、運転をした。

「おっ、そろそろ「しあわせ村」に着くぞ。ちょうど山も上がって
きたところだし・・・」

『しあわせ村へようこそ!』と看板に書いてあった。

キキー!

ブレーキ音が鳴り、タクシーは停車した。

バタンと、タクシーのドアが開く。

ランはイキオイよく飛び出す。

「わあああっ!」

ランは辺りを見回し、感性の声を上げた。

あたり一面は、雪景色。

木がいつぱいあって、その上にも雪が乗っかっている。
でも、梨が生っている。

「おーい。役場はそこだから、話しかり聞いて早くこの村に慣れ
るんだぞ！」

「はーい！」

「それじゃあ、また！」

そう言つて、運転手はどこかへ去つていった。
ランは、真後ろにあつた役場のドアを開けた。

カラーン・コロンとドアにつけてあつた、鐘が鳴る。

「いらっしゃい。えつと・・ランさんね。こちらですよ」

受付の人が、柔らかい微笑を浮かべて、手招きする。
ランは、二つのドーナーがある机の左側へ向かつた。
右側は、手紙のマークが書いてあるマットがしいてある。

「改めていらっしゃい。ようこそ「しあわせ村」へ。まずしあわせ
村について少しお話をします。この村は小さい村です。そして、人
数も多すぎては困るので、最大8人しかこの村にはすめません。ち
なみに、あなたとお店関係の方々以外の方はランダムに引っ越しした
りします。では、まずあなたのおうちへいってください。えつと・・

」

役場のお姉さんは、近くにあつた箱を探り出す。

だが、目的のものが見つからないのか、後ろのほうまで行く。そし
て、最終的に、

「村長さんー。地図はどこにあります？」

「地図？それならここじゃ」

40代前半の「村長」と呼ばれた優しそうな男が、立ち上がりお姉
さんに箱を渡す。

「ああ、ありがとうございます」

お姉さんは、ランに箱の中身を渡した。

「はーい」

ランは手のひらサイズの、機械を渡された。

「それは、村の地図・日時・道具・お金・友達リスト・電話機能・他多数が入っている、機械。「樂々携帯機械」略して「R・K・K」です！」

「あ・・R・K・K・・・ですか？」

「そうよ。そこに個人設定を入力するアイコンが出てるでしょう？それをタッチして・・・ペンは後ろについているわ。それで、名前・性別・誕生日・好きな色・好きな音楽のジャンル・好きな食べ物を入力するの」

「・・・・？」

意味が分からぬまま、入力していくラン。

すべてが終わつたとき、鐘が鳴つた。

「ありがとう。この鐘は五時の合図なの。この後、センリさんに頼まれてランさんをお店に連れてくるよう頼まれているの」お姉さんはそう言つて、さつきランが入力したデータをパソコンに移し返した。

「村長！ここまで終わりました。後は、帰つてからやります」

「OK・早く行つてきなさい」

「はい」

そして、ランはお姉さんに連れられて、センリという男の店にいくことになつた。

第一物語・しあわせ村（後書き）

騒がしい、村の生活…ランはどうなる…？

手書き・友達（前書き）

お姉さん連れられ、ヤンコの店へと向かうラン！

センリとこの男の店になってしまったラン。センリの店は、小さいボロボロの店であった。

だが、一応品揃えはある。といつても、7~8個だが。

「おうひーこりひしゃーい・・つてオマエがランか。うつすー・オレがセンリだ」

「あつ・・ビ・どうも。ランです・」

ランは軽く会釈をする。

「なんだなんだ！？ 霸気がないぞ霸気が！」

「あなたが、ありすぎるんです！」

お姉さんが、突っ込む。

「なんだ？ ルーナ、よくオレに突っ込めたな」

「はあ～～～～～？ 馬鹿じゃないですか？ それよりわいと説明してあげてくださいよ」

「おうひ、えつとな、オマエは今、またに持ち金の田ー・そつだろ？」

「は・・・・・はあ」

「とにかく」とで決定ー・オレの仕事を今日だけ手伝えー・バイトだバイトー。

ランはあまりの声の大きさに耳を塞ぎたくなるようだつたが、まあ我慢した。

「じゃつ、まづこれに着替えるー・せっかくの服が汚れちつては、ダメだ！」

「えつと・・？」

センリから渡されたのは、服の絵が描いてあるカードであった。

「これはね、R・K・Kでスライドさせるの。まじかーの、溝に

「ああ・・」

ランはうなずいて、カードをスライドさせる。

すると、あつとこり間に、今までのワンピースが作業着になる。

「わあっ・・・

「よーし、着替えたな！では早速一つ田ーーこの花の種・木の苗を植えてきてくれ！」

またもや、花の種が書かれたカードが10枚と、木の苗が書かれたカード5枚が渡される。

「これはね、スライドさせた後、植えたい場所にこのカメラを向ける。それで「OK」ボタンを押す！するとそこには、花の種が埋まっている！いっさきに何枚もスライドさせても、メニューボタンで植えたいものを押せばできるからね。カードはスライドさせた後、消えるから」

そう言つてお姉さんは、見送つてくれた。

「えつと・・どこに植えようかな？」

ランはいろいろ見た後、どこに植えるかなどを決めて、カードをスライドさせた。

なるほど、確かにカードが消えた。

そして、カメラを向け「OK」ボタンを押す。シユツ、と花の種が埋まった。

「おお・・ハイテクつてやつですか？」

ランは次々に植え、店に戻つていった。

「早いな！じゃあ次は、配達だ！これは体力の問題だ！この家具を「レイン」にもつていいつてくれ！分からなかつたら、「村の人」つてアイコンを押せばわかる！現在地もな！」

「あ・・ありがとうございます！」

「おつ、霸氣だ霸氣！その調子だ！」

「じゃあいっつてきます！」

「おうよっ！」

ランはそのまま「レイン」の元へ行つた。

「村の人」というアイコンを押すと確かに、8人の顔が映つた。

レイン・レイン・レイン・レイン・レイン・あつた！

レインはランと同じ歳で、可愛らしい控えめな女の子であった。

綺麗な茶色の長い髪、おそらくどこかの令嬢だらう。

下のほうに「個人情報厳守」と書いてある。

えつと・・レインはどこに・・?

ランは現在地を調べた。すると、案外近くにいた。

キキ ツツ・!

煙が出るほど急にランは止まった。

「い・・いた!!」

ランは急いで、レインの元へ行く。

「レ・・レインセ ん!!」

レインは慌てたようにして、ランを見る。

「・・・どなた・・でしょ?」

「あ・・紹介が遅れました・・! あたし、ランっていつのー。」

「ラン・・? わたしは・・レインです。よろしくね」

「う・・うん・・よろしく・・じゃなかつた! これーお届け物!」

「えつ?」

レインはランから、カードを受け取った。

そして、スライドさせる。

「まあつーこれは・・王女のティアラー?」

レインは、口を押さえながら叫んだ。

「お・・王女のティアラ・・? それって、凄いの?」

「ええー! とつてもー! ありがと! やこます! では、お礼に・・はい

!」

「?」

「これは、一応一万円です。まだここに来たばかりだと、お金持つていらっしゃないでしょ? うから」

「あ・・ありがと!」

ランはやつれて、また、店に向かつて走り出した。

レインはランの後姿を見送った。

「・・お友達になれるかしぃ?」

レインちゃんが言つて、柔らかく笑つた。

手伝い・友達（後書き）

新しい友達ができた！

手伝い終わり・新たな友達（前書き）

レインと友達（？）になつた。ランでした。

手伝い終わり・新たな友達

「・・お友達になれるかしら？」
レインは、微笑んだ。

「ただいまです！」
「おうよつ！どーだつたか？」

「バツチリでしたよ！」

「そうかそうか。じゃあ、次はこの荷物をキイルに！」

「はーい！」

ランはカードを受け取り、また走り出した。
また、「村の人」のアイコンで探し出す。

今度はすぐ見つかった。

男で、歳は何気に同じ。

まあまあ 美形であった。

しかし、今キイルがいるのは村の端の大木の上であった。
しかも、今入る場所と真逆の方向。

「えへへへ・・・」

ランは不満を漏らしながらも人間離れした体力と運動神経で走り出
した。

キイルは、今、大物を釣り上げようと頑張っていた。
もちろん、つれるわけは無いが、頑張っている。

髪・瞳と同じ色のこげ茶で、背はランより少しだけ大きい。
こげ茶の瞳で水面を見ている。

ピクッ、ピクピクッ！と、浮きが沈んだ。

「！」

キイルは、チャンスを狙つて、引き上げた。

「いっけえええええええつつ！」

ザバ

ンンンシシ！！

なんとも大きな魚が釣れた。

意外でありますた。

キルは喜びの舞を踊る。

「あの～・・・キイル君ですか？」

突然、下から声がした。

そこには、ランが立っていた。

ん
・
・
・
・
・
? だ?
「

「あたしの人生」という

「ふ」腰を昂げて、やがて「な」と

「シナギハナタケ」の「シナギ」は「シナギ」の「シナギ」。

その瞬間、ランはその場からいなくなり、大木の上にいた。

「アーニー? 」「おう? 」

卷之二

キルは叫んだ。

「どうしました？ はい。お届け物です」

え？ あ、どうも

「それじゃ！」

とひつ、と無事地面に着地し、走り出した。

「・・・なんなんだ・・?アイツ

キイルは、あっけになつたまま、止まつていた。

「ただいま！ 次は？」

「おつよつ一次は、これを頼む！これが最後だ！」

「うそっ！…これは誰に？」

「えつとな・・・ネイレンだ」
「分かりました！ いつてきます」

ランはイキオイよく外へ飛び出すと、ネイレンの場所に向かった。

そして、調べて見る。

が。

「・・・・・あり？」

「じ」をじりやつても見つからない。

地図を見る。すると、引越したという知らせが入っていた。

「ええええええええええええ！」？

どうしようつ、どうしようつ！

ピ
ン！

ランの頭に何かが浮かんだ。

「関所にいつてみよう！」

関所なら、引っ越した人の村が分かるかもしれない！

猛ダツシユで関所に向かう。

「え？ 木苺村ですか？」

「うん。そうだよ。ネイレンさんに何か御用かな？」

「は・・・はい。この荷物を・・

「ああ、だつたら届けておくよ。そういうシステムもあるからね。じゃつ、ここにサインをお願い」

「はい」

ランは、用紙にサインをする。

「はい。ありがとう。これで、明日には届くはずだよ」

ランは関所の人を見送られて、店に向かった。

「ただいま！」

「はやつ！」

「ホントね・・

「関所に行つたら、システムがあるとか何とかで・・

「コイツ、頭いいな。よし、バイト代20000円だ！」褒美代50

〇〇円だ

「わーい！ありがとう」「さーす」

ランは貰つた、カードをスライドさせる。

そして、今の持ち金がやつと「3500円」になつた。

バタン、ドアが閉まる。

その瞬間。

「きや

！…終わつたああああああああ…！」

あらん限りと叫んだ。

「ふう…まずどこ行こうかな？」

ランは辺りを見回した。

すると、横には「仕立て屋」があつた。

「…まず、服を着替えよう！」

そう思い、ランは中に入つて行つた。

カラリーン

軽快な鈴が鳴り、ドアが開いた。

中には、明るい音楽が流れている。

「いらっしゃーい！Y・I・Hへ！」

また変な名前が。

一瞬声に出しそうだつたが、のどに押し込んだ。

「今日は～…つて、初めての人か！ごめんね。ここはY・I・

H！「安い・いい品・豊富」なみせだよ～ん！」

確かに、安い・いい品・豊富だけど、その名前は無いだろ～。またもや、出てきそうだつたが、また喉に押し戻した。

「で？今日はどんなんのが？」

「えつと…動きやすいの」

「OK…えつと…あつたあつた…」この質問に答えていつてね…」

ランに渡されたのは、薄いモニターであった。

質問・1好きな色は？ A・青

質問・2好きな柄は？ A・ストライプ

質問・3ワンピースか上と下で別れている服どちらが好き？ A・

後者

質問・4長袖か微妙か半そでか袖なしどれがいい？ A・微妙

質問・5キツイのがいいか、ぶかぶかどっち？ A・ぶかぶか

質問・6ズボンとスカートとケロットどれがいい？ A・ケロット

・

なんか変わった質問だな……と思いながらも、ランは質問に答えて言った。

すべてが終わったとき、奥で作業していた人に、カードを渡された。

「はい！これがあなたの、服よ！ぜひ着てね！」

ランはスライドさせて見る。

すると、青色の脇に水色のストライプが入った、ちょっと大きめの微妙な袖のシャツ（丈が異様に長い）に、膝までの柔らかいジーンズのズボン・なぜか青いスニーカーまで付いている。

「わあっ！可愛い！オマケに、この青いリボン・あげる！」

ランの腰まである薄い水色の長い髪を、左右両サイドで結ぶ。

「やっぱし、かわいい！」

店員さんは、店内を駆け回り、「可愛い」と叫ぶ。

もうひとりの店員さんが、今のつまごつまごつことで外に出してくれた。

外はもう夕方であった。

月が見えてきた。

「きれ……」

ランはそう言葉を漏らす。

そして、ランは家に戻つていった。

手伝い終わり・新たな友達（後書き）

「んにちわ。やつと第三話（一応、第一物語の第三部）です。これからも頑張りますのでよろしくお願いします！」

予定・嘘・薬（前書き）

ぼちやんつ・・

浮きが水の中に一回沈んで、また浮き上がる。

「大物釣れるか〜？」

陽気な声がした。

予定・嘘・薬

月が綺麗な夜。

ランは帰つていった。

翌朝。

ちちちち、と小鳥の鳴き声が聞こえる。

むくつ、とランは起き上がり、大きなあくびをする。

「ふあああああ・・・今何時？」

問い合わせるが、返事は返つてこない。

「・・・・・あつ、そつか。えつと・・時計・つて無いんだった。じやあ・・・」

ランはそう言って、鉛筆と紙を取り出した。

「今日の予定。必要最低限のものを揃える！村の人たちに挨拶をしに行く！」

ランは予定を立てると、すぐさまベッドの上から降り、髪を結ぶ。そして、洗面所にいく・・・・・・が。

「あ・・・あれえ？」

どこをどうしても、洗面所が見つからない。

水道管はあるのだが。

「・・・・・まつ、いつか。川に行こー」

ランは、タオルを持って外へ出た。

わいわいわいわい・・と川は流れている。

「わあ・・・」

ランはしばらく見とれていたが、地面に膝を着いて顔を洗つた。洗い終わつたところで、タオルで顔を拭く。

「ふうつ！気持ちよかつた・・あつ、もうこんな時間！」

ランは日が昇つてきたので、急いで家に帰り着替えなどを済ませた。

食事は、生つて いる梨を食べた。

甘くて、シャリシャリとて もと ても おいし い。

昨日 作つても うた、服を 着る。

さつきは 軽く 縛つ て いた、髪を しつかり 結ぶ。

すべての 準備が 出来、外へ 出よ うと したところ。

トントンッ、と ドアが ノックされた。

「はい？」

「・・あの・・レインです。朝早くすみません」

「? レインさん?」

ランは、家の ドアを開ける。

そこには、綺麗な 服に 身を 包めた、レインが いた。

「どうしたの? レインさん?」

「あつ・・「さん」付けは しないで ください。では 無く、「お友達」になつて ください ませんか? 嫌で あれば 別に かまい ません けど」

「いえ、別に 大丈夫です けど?」

「それは よかつた。 そうです、その 証に コレ・・「洗面台」を びつぞ。わざわざ、川まで 行くのは 大変で しょ?」

レインは そう 言つて、ウインクを した。

・・・見た? て いうか、見られ ちゃつた・・。

ランは 恥ずかしく 思いながらも、受け取つた。

「後、キイルとも お友達になつて くださいね。この 村、子供が 3人で 大人が 5人 しか ない 小さな 村です から・・友達が 少ない んです・」

「・・・そ うなん だ・・分かつた。いいよ! それより、付き合つてよ

!」

「・・・? どこ です?」

「村の 人に 挨拶!」

ランは、可愛ら しい 笑みを 浮かべた。

「「」が、ケイセツさん の 家です。ケイセツさんは、釣り 名人なん

ですよ。で、こちらがレスガさんの家です。レスガさんは、一流のガラス職人なんですよ！」

レインは、ランにいろいろなことを教えてくれた。

この村は、いろんな特技を持つている人がいること。村長さんは、車の「レクター」と「うー」とや。

いろいろ教えてくれた。

最後に、キイルの家へ来た。

「キイル？ います？ キイル？」

レインが、ドアをノックする。

返事は無い。

「・・・可笑しい・・・。何でいないのかしら？」

「どこかいってるんじゃない？」

「ううん。そんなはずは・・」

「何してんだ？ なんどころで」

不意に後ろから声がした。

「「えつ？」」

二人は同時に声を上げた。

なんと後ろには、キイルがいた。

キイルは、生意気そうな顔をしてみている。

「よかつたわ。キイル、ラン・・が挨拶に来ているの」

「あつ、どうも」

ランは後ろを向く。

「・・・・どうも。えつと・・ラン？」

「うん」

ランはそう言いつと、軽く会釈をした。

「オマエ・・前、大木のこと覚えてるか？」

キイルが、突然言い出した。

「大木？ ・・・・・ああ、アレのこと？ 配達の時の

「アーラー君がたんだ？」

キイルは真顔で言う。

「・・・・やりたい？」

ランは薄く笑いながら聞く。

「もちろん」

ギイルも負けずと、薄く笑う。

スバル、今日はやりたいんだくれ
いい。教えておける
が

「んなぐりい！」平次たまはり！

アイツ、なんか最近なんだよな？…この前だつて、引つ越してくるやつが「女」なんだ。どんなやつかな」とか何とかかんとか言つてたら、急にいなくなつてたし

いやいや、貰うけよ。

木陰から、お姉さんがツツコンでいた。

「まあ、いつか。やるぞ

キルが声を上げた。

卷之二

というところで、ランとキイルの修行は始まつた。

村の奥の公園の、ブランコの上。

キイ　・・・キイ　・・・ビバランゴがなる。

レインが泣いていた。

ひとり、寂しさの中で。

また・・わたしの信じれる人が消える・・・。寂寥たるお父さん
も・・皆いなくなる。

ひとりは嫌だよお・・

ヒトリハイヤ。

サビシイノハイヤ。

ミンナトイツショガイイ。

ダカラ・・ヒトコニシナイデ。

ヒトリハイヤ・・。

「ツンツン・・・。

後ろから足音がした。

「・・・・・どう・・しました?」

男の声だ。まだ若い男の声。

「・・・ヒトリハイヤ」

レインは、小さな声で言つ。

「そうですか・・・では、何が嫌なんですか?」

「皆がいなくなること。キイルはランに夢中。キイルは運動が好き
だから・・。運動ができるほうが、キイルは一緒にいたいと思つ」

「では、その運動のできる子が嫌なんですか?」

「いいえ、ランは大好きよ。まだ、ぜんぜん話したことは無いけど・
・優しい感じがするの・・」

「では、キイル君の気持ちを操る薬を上げましょうか?」

「えつ?」

レインは、顔をあげる。

気持ちを操る薬?

「これで、ランって子の興味を消してしまえばいいんですよ。話は

しますが、ずっと一緒にいないでしょ。・・使いたくなれば、使わないで良いです。使いたければ、付いている紙にサインをしてください。ただ・・あなたがどうなると、わたしには関係ありますせんがね。それではさよなら！』

男は、マントをひるがえし、さっさと歩いていつてしまつた。

レインの手には、男から貰つた薬が握られていた。

『気持ちを操る？

レインの心の中に、この言葉がエコーでよぎる。

「・・これをつかえば・・」

レインは、薬を強く握つた。

「キイルは・・・」

レインは、薬を見つめた。

その時ほんの微かだが、薬が赤く光つた。

あなたの体はわたしがいただきます。

どこからか、さつきの男の声がしたが、レインには聞こえなかつた。

予定・嘘・薬（後書き）

こんばんは。
サイキアスカです。
ちょっと、怪しい人物が出てきましたね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4192a/>

しあわせ村 物語

2010年10月20日15時09分発行